



環境フィールドワーク

環境フィールドワークのねらいと実践

環境フィールドワーク委員会

環境フィールドワークとは

環境問題を一言で表現するとすれば、これまでの人間の知が及ばないところでおきている問題であるともいわなければならない。人間の知は現実の混沌とした状況から特定の法則を見つけ出すことに得意であり、特定の目的を達するために必要なプロセスを秩序立てることに得意であった。しかし、混沌とした全体を捉えること、一つ一つのプロセスがシステム全体にどのような状況をもたらすのかについて知ることは得意ではなかった。そのような、人間の知の裏について環境問題が現れたととらえるべきであろう。

そうであれば、環境問題を取り上げることを目的としている環境科学部の教育は、これまでの知の蓄積だけを伝えることが柱になるのではなく、これまでの人間の知を覆すこと、あるいは人間の知をうまく使いこなせるように相対化できること、すなわち知の総合化ができなければならない。もし、教科書的知識を伝授することによって環境問題を解決する知恵がえられるのであれば、環境問題などそもそもないはずである。環境問題はまさにフロンティアに存在する問題であり、環境科学部の学生はフロンティアに立ち向かうことのできる資質を獲得することをめざしているのである。

そのためには、知識と現実の間を行き来できる能力をもたなければならない。情報を手に入れる手段が発達したとはいえ、やはり教室の中だけでは現実に接することに制約がおおきい。そこでフィールドへ出て学習しようということになるのである。

環境科学部では現在、1回生には環境フィールドワークが、2回生には環境フィールドワークが、3回生には環境フィールドワークが必修科目として配置されている。もちろん、他の実習

科目や演習科目でも教室からフィールドにできることがあるが、環境フィールドワークでは、フィールドに出ること自体が主要な目的となっている。すなわち、フィールドワークの目的は、これこれのこと(the thing)を発見することではなく、なにか(anything)を発見することである。したがって、フィールドワークには本来筋書きがあってはならないのかもしれないが、一遍に視野を360度に広げることは無理があるので、徐々に視野を広げることをねらって、フィールドワーク、にそれぞれのねらいを定め、そのねらいにあった(もちろん時間割や教員配置の現実的条件を考慮して)編成をしている。

環境フィールドワークのねらい

実際の地域環境問題が生起するフィールドに足を運び自分自身の五感を通して環境問題に触れ、それを図、文字、数値データに記録する方法を学ぶ。また自分自身で記述した記録から、地域環境問題がどのような問題構造をもったものであるか、グループ討議を通して組み立てる演習をおこなう。

環境フィールドワークのねらい

地域環境にかかわる情報は多分野にまたがり、性質も多様である。これらの環境情報を収集・解析するために、対象地域を特定し、フィールドワークを通して、自然調査や社会調査などの基本的な手法を学んでいく。ねらいは、フィールドワークの手法を実際の地域分析に適用することにより、現場に即した調査態度と分析方法、レポートの作成、発表の方法等を学ぶことにある。

環境フィールドワークのねらい

実際の環境現象・環境問題がどのような構造を

持った問題であるのかを解明し、それに取り組むにはどのような手法が可能であり、有効であるかを、フィールドデータの収集、分析、整理を通して明らかにする。(以上1997年版「履修の手引き」より)

本来の性質からして、環境フィールドワークは教員と参加する学生の試行錯誤の繰り返しによって形ができてくるものである。したがって、現在の授業がずっと踏襲されていくとは考えられないが、3年間の試行の結果として、以下のような実践を行っている。

環境フィールドワークの実践

Aグループ

テーマ：都市の生活空間

担当教員：濱田五郎、上野健一、金木亮一、内井昭蔵、伏見碩二、西尾敏彦

都市構成の主要な空間要素である都市公園をテーマとして、都市公園の現場を観察し、公園とは何かを考え、今日の公園の問題点を分析、問題解決方法を検討、さらに、新しい公園のあり方を提案することをフィールドワークの目的とした。対象を彦根の都市公園34箇所から7箇所(総合公園2箇所、地区公園1箇所、街区公園4箇所内児童公園1箇所)を選定した。

第1週はテキストによる講義で、都市公園の発生、定義、歴史および国内外の代表例について概説、次いで日本の都市公園の種別、法制度を解説し、滋賀県と彦根市の都市公園の現況および整備状況を説明した。第2週は事前に作成しておいたフィールドノートを持参(A4判1枚)して記録できたので、授業時間内に7箇所を巡回した。フィールドノートはレポートする都市公園を選定して第3週の授業の初めに提出し、7班に分けて授

業の前半で個別に作成してきたレポートとフィールドノートを参考して班毎に討議し、後半で発表会形式の討議をした。最終レポートはA4判5枚以上を次のテーマによるフィールドワーク授業の前日までに総括して提出とした。

学生の受講態度とレポートからみてフィールドワーク所期の目的は大方達成されたと考えられる。(文責：濱田)

Bグループ

テーマ：大中の湖干拓地を見て環境問題を考える
担当教員：矢部勝彦、奥野長晴、近雅博、

三谷徹、長谷川博、柴田いづみ、村瀬潤

本フィールドワークでは、琵琶湖最大の内湖であった大中の湖干拓地の中心部あるいは周辺部を歩き、干拓地の生物相や景観の観察を通して、今日のわが国の食糧生産のありかた、農村社会の生活、湖の保全法などについて考えた。教員が現地調査のヒントを与え、学生はそれを参考として、見たこととそれをもとにして考えたことを発表・討議し、レポートにまとめた。担当教員が提示した現地調査のテーマは以下の通りである。

- 1-1 干拓地における土地利用と土・水環境を考える(矢部)
 - 1-2 米作農業は琵琶湖の水質の保護者か加害者か(奥野)
 - 1-3 人間活動による自然環境の改変(近)
 - 1-4 農耕風景の中の「かたち」(三谷)
 - 2-1 干拓地の作物から環境問題を考える(長谷川)
 - 2-2 農村空間の付加価値の創造(柴田)
 - 2-3 土地利用の変化と環境(村瀬)
- (文責：長谷川)

Cグループ

テーマ：廃棄物とリサイクル

担当教員：金谷健、富岡昌雄、伊丹清、丸尾雅啓、
仁連孝昭、岡野寛治、迫田正美

廃棄物が捨てられ、処理され、処分される現場はどうなっているのか、またホモ・ディスポーザーとしての自分自身はどのように行動しているのかを見つめ直すことにした。具体的には、彦根市の清掃工場、最終処分場、湖東町のごみ燃料化工場、食品かすを使って飼料を配合している大中農協および飼育農家の視察およびヒアリングにより廃棄物をめぐる現状をつぶさにすることができた。また、自分自身が家庭であるいは下宿でどのようにゴミをだしているかについて、細かい記録をとり、大学内でゴミがどうなっているのかについて調べ上げ、廃棄物問題をめぐる現状を自分自身の問題として整理するという演習をおこなった。自分が直接関与している問題であるだけに、それぞれにとって興味深く取り組むことができたと思う。(文責：仁連)

Dグループ

テーマ：島緑地の環境保全効果：KJ法による
野外観察データの整理

担当教員：上田邦夫、杉元葉子、籠谷康行、
鈴木雄一、小林正実、小林圭介

大学近くの木和田神社の社寺林、犬上川河辺林、湖東町押立神社の社寺林、多賀町大滝神社の社寺林をバスを利用し順次訪れ、その地域での景観、植物、土壌について基礎的説明を行った。その後学生にはその場所場所で見たり感じたりしたことを、箇条書きのメモにさせた(1週目)。メモは実験室に持ち帰り、4～5名のグループをつくりKJ法によりまとめさせ、その結果を模造紙に図示させた。(2週目)。まとめた結果を文章化し、

グループで発表させ、質疑応答をさせた(3週目)。

教員が説明を担当した分野は次の様であった。上田：土壌の成り立ち、土壌の働き、土壌の構造、自然環境と土壌など。杉元：島緑地と人々の生活、景観保全の意味など。籠谷：森林へのいざない。樹木の種類、森林の構造と機能、植生の移り変わり、環境との関わりなど。(文責：上田)

環境フィールドワーク の実践

Aグループ

テーマ：環境影響評価

担当教員：秋山道雄、安野正之、中嶋隆、
林昭男、水原渉、岩間憲治

テーマとして環境影響評価をとりあげ、その前と後で地域環境がどう変化しているかを調査することとした。対象は、滋賀県立大学と八坂地区に設定した。

まず県立大学の環境影響評価書を見て、県立大学が立地する前の環境についておおよその内容を把握した。その後、担当教員が調査方法を指導したあと、小動物や水質、土地利用などの項目について現状をおさえ、評価書と比較することになった。あわせて、この環境影響評価の審査員であった人に審査の経過を聞いたり、大学設立の準備にあたった県庁の職員にそもそもの設立経過をヒアリングした。一方、彦根市の都市計画課に出かけた学生チームは、県立大学周辺における都市計画の現状や特徴を聞いている。

大学の生協食堂から出るゴミや大学構内の交通実態を調べた学生チームは、日頃のイメージとは異なる大学の姿を発見することになった。また、八坂地区へ出かけて地元の人々から話を聞いた学生達は、大学設立前のこの地の状況や土地売却時の交渉過程を聞いて、大学設立の背景について認

識を新たにしたようである。(文責：秋山)

Bグループ

テーマ：近郊農村の水環境

担当教員：石田潤一郎、大畑哲夫、増田佳昭、
福本和正、石川義紀、上町達也

Bグループは、《近郊農村の水環境》を全体テーマとして設定し、教員6名がそれぞれの専門分野に近いサブテーマを立てて調査・演習を行なうという方式をとった。学生は教員の数に合わせて、あらかじめ6グループに分けておき、各教員が学生全員に対してサブテーマについてのガイダンスを行なったのち、各グループ単位での希望を尋ねて、属する教員を決めた。

各グループの調査テーマは以下の通りである
石川：生活系と産業系の水収支、 増田：
水田農業の変貌と水利用、 上町：野瀬川の水質
測定、 石田：都市化と水利用、 福本：水環境
とアメニティ、 大畑：降水と蒸散。

水の物理的特性から日常生活における意義まで広く学んでもらうことにおいては一応の成果があったと思うが、サブテーマ相互を関連づけるところまでは深められなかった。また専門分野と無縁なテーマを設定せざるをえなかった教員もいた点に問題が残った。(文責：石田)

Cグループ

テーマ：地域水資源の現況と保全戦略 芹川を
モデル流域として

担当教員：國松孝男、須戸 幹、小池恒男、
白岩立彦、但見明俊、奥貫 隆、
井手慎司

琵琶湖に流入する芹川とその排水河川である平田川流域をモデルフィールドとして、 水資源・水環境の現況、 景観・文化の現況、および 農

業・土地利用の推移の3課題を設定し、それぞれ専門とする教員グループが地域水資源の保全をキーワードとして指導した。まず始めにそれぞれの課題の意義を講義してから、残りの期間を3期に分けて課題ごとに現地調査を指導した。学生(45名)は15人づつ3グループに分け、それぞれ上流、中流、下流地域を担当させた。調査の結果はパソコンを使ってデータベース化して解析させ、グループごとに討論してまとめさせた。最後に調査・解析結果を発表させ、上・中・下流域の特徴を全員で比較・検討させた。このようにして変容する地域の水環境を多面的・総合的に理解させ、都市と農村地域の水資源の賦存状況と環境保全のための課題を見つけ、その調査手法の基礎を学ばせた。(文責：國松)

Dグループ

テーマ：犬上川流域の山村・農村・都市の環境
構造解析

担当教員：吉田十一、伏見碩二、土屋正春、
中山英一郎、小谷廣通、沢田祐一、
轟慎一、国重敦子(TA)

生物生態・水環境・社会集落等の環境構造の多面的分析能力を養うため、モンシロチョウの生態やアブラナ科植物の植生観察、水質検査や流量測定、土地利用や社会生活についての住民ヒアリングなどをさせた。

すなわち、まず「犬上川流域の地域環境」についての現地学習(伏見)。次に学生を3グループに分け、3週間サイクルで、生物生態(沢田・国重)・水環境(中山・小谷)・社会環境(土屋・轟)のグループ別環境構造分析を指導。さらに「犬上川流域集落の生産構造」(吉田)から総括し、グループ別研究報告会を持つ。

調査は芹川上流・敏満寺・宇尾・開出今・湖岸

道路・八坂などの集落で行った。

平成9年度のような体制で授業をした場合、学生たちは多彩な教授陣からいろいろな視点からの問題分析方法を学ぶことができる。しかし、学習動機が多様な、多人数の学生のフィールドワークを指導するには、周到的な現地予備調査と入念な野外における個別指導等が必要で、教員に重い負担がかけられる。また2回生全体での報告会は、学生数に対して、時間が足りない。全体報告会に替えて、学生にグループ別の報告原稿を書かせ、論文集を発行させる方が望ましい。

FWIは問題発見、FWIIは問題分析と、みんなで心がけて指導體制を組んだが、なぜかFWIとFWIIとがオーバーラップする傾向が出てくる。これはFWIIにおける学生の振り分け、教員配置が、FWIと同じであるためではないか。(文責：吉田)

環境フィールドワーク の実践

Aグループ

テーマ：「人里」をつくる：人間が住み、何らかの活動をしてゆく中で、人間の住み場と自然との接点に生まれる新しい場 それが人里である。(日高敏隆)

担当教員：柴田いづみ、末石富太郎、濱田五郎、石田潤一郎、井手慎司

フィールドは、近江八幡市の津田干拓地と設定し、次のように進めていった。第一段階として、対象地を中心に周辺部を含めた自然環境の原風景・地域性・歴史についての調査。第二段階は、津田町が津田内湖であった頃を知っている方や、八幡堀を復元し、まちづくりのリーダーとして活躍されている方へヒアリング。第三段階は、個人別テーマによる研究。例えば、「琵琶湖総合開発と水位の変化」、「津田内湖干拓地の問題点」、「津

田干拓地の自然背景と、自然復元への展望」、「近江八幡の都市計画の歴史とまちづくり」、「近江八幡の産業の変遷」、「ヴォーリスの建築」そして、「アメリカで起こったSOHOが近江八幡にとって馴染むものなのか、さらに、近江八幡にとってふさわしいアプローチとは」等。第四段階として、実際の企画計画を形につくりあげ、第五段階は、ホームページとして情報発信。情報の確認の意味で、授業において、Role Playing Gameを行い、又、日常的には、情報や意見の交換、資料の配布はメールリンクAnetを通じて行っていった。(文責：柴田)

Bグループ

テーマ：環境負荷の少ない地域づくり

担当教員：秋山道雄、坂本充、林昭男、金木亮一、轟慎一

対象地域を、赤野井湾集水域(主として守山市に含まれ、野洲川左岸に位置する)とした。ここは、かつて典型的な都市近郊農村であったが、今日では都市スプロールが進み、当地域の流末にあたる赤野井湾の水質は、琵琶湖のなかでもっとも悪化している場のひとつとなっている。1996年には地元の住民が中心となって「豊穰の郷赤野井湾流域協議会」が設立され、関係住民が環境を調査したり、望ましい地域環境のあり方について話し合いを続けている。

学生は5チームにわかれ、守山市の社会構造や事例としてとりあげたコミュニティーの特徴、水環境の実態などを調査してきた。それと併行して、下水処理施設の展開状況や住民の環境保全活動、野洲川南流廃川敷跡地利用計画などの内容を調べ、現行の動きに代わる代替案の検討にも手を染めようとしている。単なる現況の調査にとどまる

ことなく、環境への負荷を少なくするためにどのような地域づくりが必要かを具体的に考えていこうとしているのがこのチームの特徴であろう。(文責：秋山)

Cグループ

テーマ：地域空間の創造

担当教員：内井昭蔵、福本和正、迫田正美、杉元葉子、小林正実

身体を持ち、空間との生き生きとした呼応関係の中に豊かさを見いだしうる人間の在り方をテーマにした都市空間形成の提案。新規の計画的な開発ではなく、現在ある都市を読み替え、微妙に手を加えて豊かな空間へ成長させる手法を、彦根市中心部を対象に試みた。

京都の哲学の道及び坂本の街並みを見学して都市空間の印象を支える構造を考察した後、グループごとに調査領域や観点を設定して対象地域を数回にわたってフィールド調査し、都市再生の手がかりとなる潜在的魅力を持つ「場所」を抽出し、それらをつなぐストーリーを討議した。それぞれの「場所」への理解を深めるための歴史その他の調査も平行して行い、それらに基づいて最終的に、彦根市の魅力を引き出す散策ルートの提案書を作成。すべての作業を全員で行い、コンセプト作りから作業計画に至るまで学生の議論の中から誘導し、多くの人の共働で一つの企画が立ち上がる過程を体験した。多岐にわたる専門の学生が参加しなかったのが残念である。(文責：杉元)

Dグループ

テーマ：地域環境の変化と水循環

担当教員：石川義紀、水原渉、伏見碩二、大畑哲夫、上野健一

Dグループの具体的なテーマは 「地域特性と

窒素収支」(石川) 「都市の居住環境の変貌と考察」(水原) 「水循環」(伏見・大畑・上野)であった。Dグループの実施方法は、多岐にわたる各教官の専門を生かすために、あえて1つのテーマに縛るのではなく、全体としては緩やかな連携を保ちながらも、実施方法はグループ内の複数または個人による指導體制をとり、フィールドワーク3を卒論の前段階としても位置づけ、高学年用の野外調査・研究活動を中心に行った。なぜならば、フィールドワーク3のテーマを選択するにあたって、学生の多くは卒論を意識するであろうし、また外部的要因としても、就職協定廃止の状況下では、ますますフィールドワーク3を卒論と関連づけざるを得なくなる傾向が進むであろう現実に、わたしたちはできるだけ対応していきたいと考えたからである。(文責：伏見)

Eグループ

テーマ：日本農業の多面的価値

担当教員：奥野長晴、矢部勝彦、長谷川博、三谷徹

炭酸ガスや栄養塩の発生源として環境への加害者、米余りによる減反、継承者の不在、どれをとっても日本農業の将来は明るくない。多額の公的補助金の助けなしでは、日本農業は存続できない体質になっている。目先の食料の生産だけを見ると、日本農業の存在価値は薄い。それなら、日本から農業を無くしてもよいのか?この命題に学生自ら答えを見出すことがこのフィールドワークの目的である。

最初の授業のとき、全体討議により、「食料生産以外にも農業の役割あり」との結論を導き、その役割を追求することをプログラム化した。すなわち16名の学生を、4グループに分け、奥野、矢部、長谷川、三谷の4名の教員の指導を受けなが

ら、学生一人一人が彦根市周辺の農耕地を対象として、美しい景観と豊かな自然の創出および汚濁物の流出の低下などをキーワードにして、上記目標を達成するために、どのように農業を変え、どのように農耕地を再編成しなければならないかをレポートし、発表することとした。新しい「知」を創り出す過程を学生一人一人が経験できたと考えている。このことが最終結果よりはるかに重要である。(文責：奥野)

Fグループ

テーマ：リサイクル社会

担当教員：仁連孝昭、富岡昌雄、金谷健、伊丹清

10月中は、全員で市内38世帯分の家庭ごみ(合計約100キロ)を、ゴム手袋にマスクをして、ごみ袋を開けて、実際にごみに触りながら、組成調査した。得られたデータに基づいて、厨芥コンポスト化や容器包装ごみリサイクルなどによる、ごみ減量効果やごみ処理コスト低減効果などを試算した。学生の感想・評価は概ね、「くさくて大変な調査だったが、ごみの実態がわかり、おもしろかった」であった。

11月以降は、教員ごとのテーマに分かれて調査を行った。テーマは、企業のリサイクル社会に向けた取り組み(仁連)、モミガラの処分・利用実態を現場に追う(富岡)、リサイクルに適した生活の場の在り方(伊丹)、彦根の一般廃棄物排出・処理処分・リサイクルの実態と将来計画(金谷)である。学生は、企業や役所等の現場に行き、担当者のヒヤリング等を行い、12月の中間報告会で充実した報告、討議を行った。今後、1月末の最終報告に向けて、追加ヒヤリング等を行う予定である。(文責：金谷)

Gグループ

テーマ：生ゴミはどうなるか

担当教員：岡野寛治、土屋正春、上田邦夫、小谷廣通、近雅博

人間活動により排出される廃棄物は自然界の自浄能力を超えている。その一部はゴミ処理のための巨大なシステムでしのいでいる。そこで、当グループは我々の家庭生活からも排出される身近な廃棄物、生ゴミはどうなるかに着目した。生ゴミの処理法としては、埋立処分、焼却、堆肥化などがある。それらの中から堆肥化について、まず検討した。堆肥化の過程でのガスの発生量と有機物の分解速度を測定し、堆肥化処理の条件を考察した。堆肥化においては、発酵を促進のための重要な要因のひとつとして微生物の選択があげられる。また、堆肥化された生ゴミは農耕地に肥料および土壌改良材として還元され、土壌中の微生物や小動物などによって分解される。そこで土壌微生物のセルロース分解菌の選択手法を学ぶとともに、小動物によるゴミ処理の可能性についても検討した。さらに、社会の中で生ゴミはどのように処理されているのか、また生ゴミの社会的な再利用を円滑にするために必要な条件は何かなども調査・考察した。以上の調査・実験を通じて自然界の生態系に組み込まれた生ゴミの処理について考察した。(文責：岡野)

Hグループ

テーマ：森林小流域における物質動態と酸性雨の影響

担当教員：國松孝男、村瀬潤、籠谷泰行、久馬一剛

本学の集水域実験施設の森林実験流域を共通の調査・研究フィールドとして、酸性雨が森林に与える影響をメインテーマとするフィールドワーク

である。学生には、林地の地質・植生と渓流水の水質および土壌の種類と酸性雨の中和容量、林地土壌の構造の特徴と酸性雨影響、土壌微生物特性と酸性雨の影響、森林構造と炭素循環、の4つのサブテーマから一つを選択させ、それぞれのサブテーマを指導する教員の研究室に配属して実験させた。14名の学生が環境生態学科と生物資源管理学科から選択した。2回観光バスを借り上げて木之本町摺墨の集水域実験施設まで全員で出かけ、それぞれのサブテーマについて合同の調査を行った。さらに合同ゼミと発表会を行い、それぞれのサブテーマの知識と研究成果の共有を図り、実験の結果を学際的に評価して、森林に対する酸性雨の影響と対策について総合的に考えさせた。(文責：國松)

Iグループ

テーマ：琵琶湖とその集水域の環境動態

担当教員：三田村緒佐武、安野正之、中山英一郎、須戸幹、丸尾雅啓

Iグループは、身近な水圏生態系である琵琶湖ならびにその集水域を対象とし、多面的に場の構造と機能を解明することを目的とした。琵琶湖では、多景島付近の水温、pHの鉛直分布を現場で測定し、別に採水器で採取した深度別の試水をろ過などの前処理を行い、水の化学分析を行った。その内容は、主要イオン成分(アルカリ、アルカリ土類金属イオン、無機陰イオン)、水生生物に関わる硝酸態窒素、溶存酸素濃度などである。さらに生物活動に少なからぬ影響を与える微量金属(鉄、銅など)を湖水より濃縮して測定した。以上の実験・実習を通し、湖沼観測と、水質分析の進め方の一端に触れた上で、得たそれぞれのデータが持つ意味を考え、琵琶湖水の現状を把握しよう心がけた。また、集水域として大きな面積を

占める水田を対象とし、大学の圃場実験施設の一部に実験区を設定し、冬期乾田での農薬分解速度を測定している。可能であれば琵琶湖水中に残留している農薬の測定も行う。(文責：丸尾)

Jグループ

テーマ：生物生産と環境

担当教員：沢田裕一、但見明俊、鈴木雄一、上町達也

県大周辺の農地とその周辺地域に生息するさまざまな生物を取り上げ、それら生物と環境、及び生物間の相互作用を調査分析し、農地及び自然生態系に対する認識を深めるとともに、環境と調和した生物生産のあり方について考えるのを目的とする。

具体的には、ごく身近な害虫であるモンシロチョウを中心に、植物 昆虫 天敵の三者の相互関係を取り扱う昆虫班(課題名：モンシロチョウから見る農地の生態環境)と、植物体内に住む内生菌(エンドファイト)を扱う微生物班に分け、それぞれ別個にフィールドワークを実施した。

昆虫班では、県大の実験圃場、県大周辺の平野部、芹川上流域の山間部など環境条件の異なる様々な地域で、餌であるアブラナ科植物の分布状況やモンシロチョウ幼虫の発生量、また各調査地域でチョウの幼虫や蛹を採集し、室内飼育と解剖により寄生性天敵の種類や寄生率を調べた。これら野外調査資料をもとに、害虫(モンシロチョウ)の発生量に対する寄生性天敵の影響評価や、天敵を利用した害虫防除の可能性について検討した。(文責：沢田)

Kグループ

テーマ：農地から地域を考える 彦根市における土地利用と農業

担当教員：西尾敏彦、奥貴隆、増田佳昭、
岩間憲治、森正樹（TA）

「農業的土地利用からみた彦根市の環境変化について」および「彦根市における野菜生産の技術と経営」のテーマについて5名づつにわかれて実施した。

土地利用関係グループ：明治30年代以後の彦根市域の土地利用変化について、国土地理院地形図、彦根市史、統計資料等から経年的に把握した。さらに、近年の農業的土地利用構造の変化をGISによってデータ化し、21世紀初頭の土地利用について予測した上で、都市、農村、自然の調和を実現するために解決すべき課題の所在を明らかにした。

野菜生産関係グループ：彦根市内を中心として野菜栽培農家、農協および卸売市場などでのヒヤリング調査を行い、それらの結果について分析または討議を行った。さらに各自のテーマについて、滋賀県内の関係機関でのヒヤリング、関係資料での調査も行った。

これらの調査結果をもとに、彦根市における環境と調和した土地利用のあり方および農業（野菜）生産技術や経営のあり方を提案した。（文責：西尾）

Lグループ

テーマ：環境保全型農業

担当教員：小池恒男、重永昌二、吉田十一、
中嶋隆、白岩立彦

Lグループは実施に当たって、環境保全型農業を既成概念として押しつけずに、自由に考えさせる、したがってテーマを環境保全型農業ではなく「農業技術と環境」とし、環境保全型農業の多面的把握に努める、フィールド性を重視する、fact findingの重視、調査対象の設定・

文献の提供を十全に行い、以後の調査、考察は学生に任せる（考えるのは学生自身）、中間検討会での意見交換、レポートの取りまとめ、最終発表を重視する、以上の7点を教育理念として確認した。

また、実施に当たって、5名の担当教員ごとに作目別・テーマ別に5つのコースを設定し、以下のように実施した。

- 1 「農業に依存しない水稲作実現の可能性」（白岩）
 - 2 「環境保全型農業の条件」（重永）
 - 3 「大中の湖地域における畜産環境問題の事例研究」（中嶋）
 - 4 「環境保全型農業の存立条件と発展条件」（吉田）
 - 5 「環境保全型稲作の技術・経営に関する事例研究」（小池）
- （文責：小池）